

LOCATION シリーズ

モノタイプ版画の応用によるチャンス・オペレーション

持 田 総 章

版画表現の領域は本来の基本的な四版種である凸凹孔平の各版種の併用や応用の範囲ばかりでなく、現代の進んだ光学技術や機械設備の導入によって精緻で高度な表現、作品の大型化、製版と複数生産の容易性等の諸問題で既成の版画そのものの概念を変えるに至ったと云える。この版画のメカニズムの変化は製版や印刷の行程に於いて自刻自刷という制作での作者と版やインクとの格闘劇的な様相を一変させようとしている。もともと自刻自刷はかつて分業化されていた原稿（絵師）、製版（彫り師）、印刷（刷り師）を一人の人間のうちに集約したものであった。作者は獲得した製版や印刷の工程の中で発想、作画の段階では考えられなかったイメージの拡がりの端緒をみい出していった。そして作品完成までの作者の手による制作の一貫性は版画を絵画という思考で捉えることとなった。しかしながら自刻自刷という一貫性は近年の科学技術の普遍化によって一作者の持つ技術の許容範囲を広げることよりも専門化を促すことになり、過去の分業化とは別な形の専門的分業が進むことになった。それは時に発注芸術に類される様な、原稿をつくり委託し、製版や印刷に関与せず出来上がったものにサインするという行為で、自作を証する版画の登場を可能とした。同時に新入の技術は複雑であった制作過程の簡略化を進め作者参加の部分を省力化する方法も誕生させた。

いまや版画の概念は版による複数の印刷された絵画であるということが周知のこととなった。また、近年複数性の問題は二枚刷れば版画であるとした考え方から離れ、例え一枚の刷りでも版を媒体とした絵画である以上版画と呼ぶ様になった。そしてこの一枚刷りの版画のことを

モノタイプ (Mono-type) と称した。モノタイプは複数性の呪縛から逃れることによって表現の可能性を膨らませることになった。画面に同じ効果を約束しなくても良い自由を持ったことは描画に於ける絶対なる筆触を凌駕する表情の豊かさを見せることになった。版を媒体にすることは描画における筆触の行為の反復性と持続性を拒否することになり、反復や持続を許さない作者の決断を促すこととなった。この決断とは印刷のためにプレス機に挿入された版と紙の例をみるまでもなく、作者が手を下すことの出来ない世界への出発の覚悟である。そしてこの決断は作者が手を加えることのできない場でのチャンス・オペレーション (Chance operation 偶然性の導入) なのである。モノタイプにおいてこのチャンス・オペレーションの観念を無くしては、制作の、創造の本来性が看過されてしまうことになる。チャンス・オペレーションは版画技法の歴史のなかでむしろ忌避されてきた。特に製版や印刷における不調整、不確実なものは論外とされてきた。

モノタイプの領域を形式的に限定することには無理があるが、大別すると押印に代表されるスタンピング (Stamping 押印) とプレート (Plate 版) を基本的なものとしてあげることができる。

この誌上展ではスタンピングの中から近年の制作に多用している火による押印のものを主体とし、移動して刷るスクリーン・プリントのものを付加した。火による押印は真赤に焼けた鉄版その他を用紙に置き瞬間に走る炎のチャンス・オペレーションを定着させた。スクリーン・プリントでは雑板の粗面での刷面の偶然の効果を期待した。



LOCATION•A 1994 90 × 90cm



LOCATION·B 1994 90×90cm



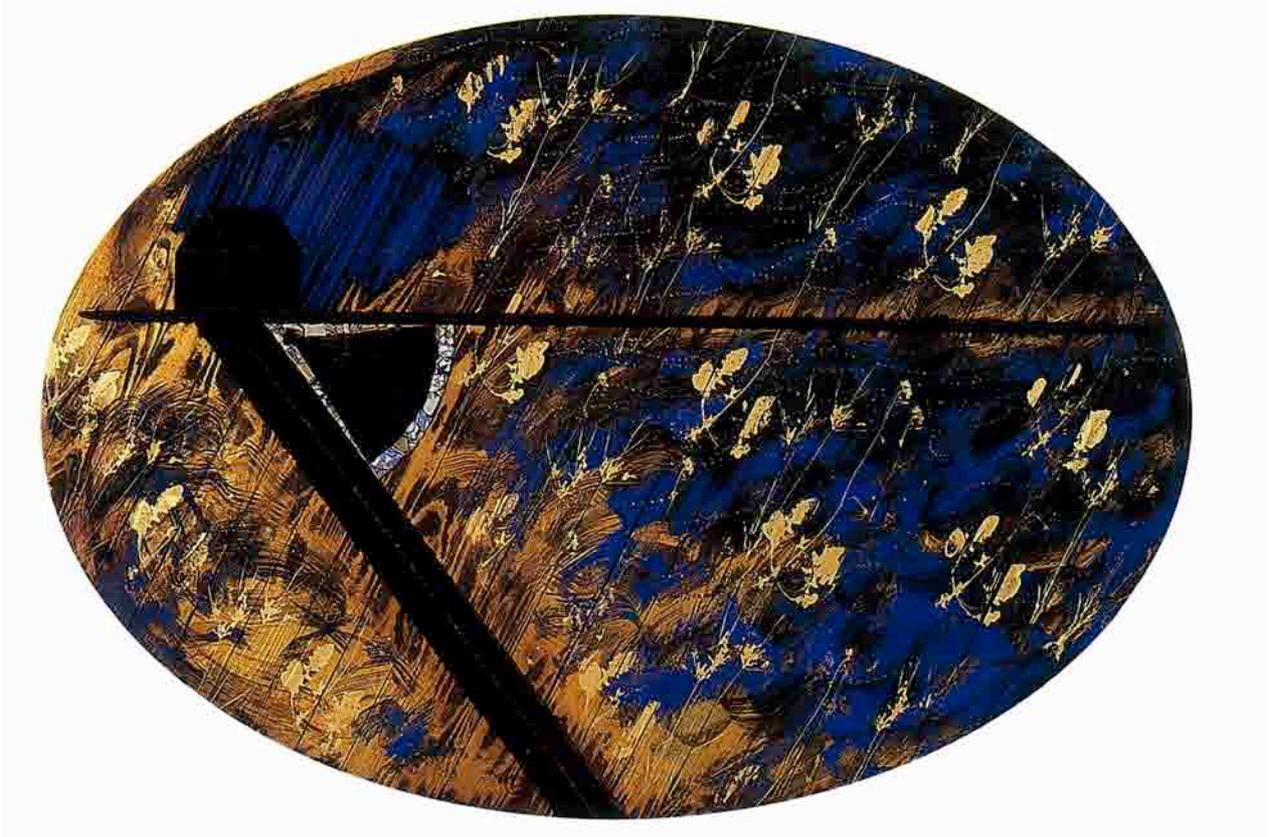
LOCATION·C 1994 90×90cm



LOCATION·D 1994 90×90cm



LOCATION•E 1994 90 × 90cm



LOCATION 90 130 × 160cm



LOCATION 89 130 × 160cm



LOCATION 89 130 × 160cm